

アリストテレス『デ・アニマ』から人の味覚の本質を考える ～「食に関する指導」の促進を展望して～

*“De Anima” written by Aristoteles and an inquiry into some thoughts and
significan concerning on nature of the sense of taste of human beings; the outlook of
promoting for eating education in the school curriculum*

新村 洋史 *Hirosbi Shinmura*
(美術学部教養部会)

序 研究の動機と問題関心；『デ・アニマ；魂について』の今日的意義

1、食育・食教育の今日的課題と『デ・アニマ』との関連について

子どもの発達に対する国民的な関心・要求の発展史（俯瞰）

近代社会になって民衆（国民）教育が公教育学校として制度化された。その発展途上において、さらに教育としての活動内容や質そのものが、社会全体の人々の関心の対象とされるようになった。すなわち、心身両面にわたり子どもの健康な発達を保障することが重要課題とされるようになった。18～19世紀の産業資本主義の本格的展開のなかで、多くの民衆は工場労働者となった。牧歌的な農業生産中心の社会や家族共同体の生活は消失した。学校制度の誕生直後、教育の中心は読・書・算（3R's）の知識や技能を身につけさせることと狭く観念されたが、両親共働きの社会生活の一般化は、朝食欠食で登校し、個人負担の昼食（弁当）も用意できないという子どもの生活実態を広げた。それが原因でその授業にさえ集中できず、授業中、空腹のために倒れる子どもたちの現実が広がる中で、公費（国庫補助金）によるすべての子どもを対象とする集団・共同の学校給食（School Feeding, Common Meals）が創設されることになった⁽¹⁾。

「共同の食事」（Common Meals）と言えば、古代ギリシア圏において習慣・習俗となっていたそれと同じである⁽²⁾。1900年を前後する時期、この経験をもとに、「子どもの学習条件の整備（教育条件整備）」として始まった学校給食は、その後、教育的価値（Educational Value）をもつ「教育」活動そのものとされ、「教育内容」（教育課程）となった。言い換えると、給食施設づくりや食事の提供（provision of meals, feeding）は学校の「福祉機能」（教育福祉）であるが、それらを「生きた教材」として「食と人間形成」（食の学習と、食を通しての人格形成の学習）を学ぶことは「教育機能」とであると考えるに至った。学校給食をめぐるこのような教育論・制度論的発想の発展史において、「食教育」「栄養教育」をはじめ「健康教育」「保健体育」「家庭科教育」などが生まれ、1940年代半ば以降、先進国において教育課程に位置づけられることとなり、現在に至っている⁽³⁾。

日本においても、1931年・1937年の「学校給食奨励規定」（文部省令）に基づき、国策

〔健兵健民〕策⁽⁴⁾として、学校給食が歴史上初めて制度的に実施された。敗戦後の1954年には、圧倒的多数の国民の要求に押されて議会は満場一致で「学校給食法」を制定・実施した。さらに2005年、「食育基本法」制定し、それにともない2008年「改正学校給食法」を制定した。

1954年法は、敗戦直後の食料不足を背景に、正しい食の理解と習慣の形成、栄養と健康の理解を中心として、その実施を国・地方自治体の「努力義務」とした。その理念は、「子どもの心身の健全な発達」や「人格の発達」に資すべきものとされた。これは特筆されるべき点である。世界の教育制度史的発展の里程標が刻印されているからである。

知育・徳育・体育の土台としての「食育」「食教育」へ

改正学校給食法はこの理念を継承し、本格的な「食育」「食教育」としての学校給食の「目標」を付加した。例えば、「協同の精神を養うこと」「(食が)自然の恩恵の上に成り立つものであること」「生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと」、さらに「食生活が食にかかわる人々の様々な活動に支えられていることについての理解」「優れた伝統的な食文化についての理解を深めること」などである。

これらの目標を子ども(人間)の生命・民主的人格発達の本性に即して検討することが今日的な課題であると筆者は考える。(食育・食教育論は、それを土台としなければ単なる「しつけ」や「知育」「徳育」に還元されてしまうからである。これでは教育論的發展がない。)

改正学校給食法は、そこへ一歩近づいたといえる。ここには「栄養補給」の学校給食像から、人格発達のための「食育・食教育」という学校給食像への転換・発展が示されている。その食育・食教育の理念・目標とは、「食」を通して人間・社会・文化を学ぶことである。食育は、食育基本法の「前文」にも書かれているように、「知育・徳育・体育」の「土台」としての教育活動である。教育が教育として成り立つための「土台」が「食育」(人間形成としての作用・働きかけ)であり、また、「知・徳・体」という教育(人格形成としての組織的・体系的な教授・学習、すなわち学校教育)の「土台」をなす教育が「食教育」であるという認識の域に到達・発展した今日であるといえる。

ところで、「知・徳・体」という教育(教授・学習)の「土台」としての「食育・食教育」の役割とは何であろうか。私見を述べれば、(1)集団と共同性を生きる力、(2)心身の発達(人間的諸能力)の土台を体得する力、(3)ゆたかな人間的感覚・感性を育む力、(4)自然・社会・文化の土台としての食認識、食を通しての人間認識(主体性・創造性)を我が物とする力、(5)「幸福追求権」「生存権」など人権としての生き方(価値観:食品公害・偽装への批判力、食料主権、安心・安全という食における「人格権」保障など)を身につけること、であると考え。これを「土台」とした「知育・徳育・体育」であってほしいと考える。何故なら、こうした「当たり前」と思われる人間的諸能力(人間力)が学校制度のなかからも奪われている今日の状況が進行しているからである。

『デ・アニマ』の今日的意義について

アリストテレスは食教育論そのものを書いているわけではないが、その哲学体系のすべてが、そして『デ・アニマ』の全体を貫く考察は、その師プラトン（ソクラテス）にならって「善き生・善き生き方」という目的論的な観点からの靈魂（魂）、すなわち生命（力）についての探求であった⁽⁵⁾。

この「食育・食教育」の今日的な課題を達成・実現するための教育・学習活動の基本的目標は、さらに端的に言えば、①食の体験・経験をゆたかにすること、②感覚能力（感能、五感）をゆたかに発達させること、③食と人間発達に関する理知的・価値観的な関心と認識を高めること、である。

これはそのまま、アリストテレスの『デ・アニマ “De Anima”；靈魂（プシケー）について』で論述されている靈魂（生命）の主要な機能である「栄養機能・感覚機能・理性的機能」に相当する問題である。このような総合的な視点から「食と人間形成」を捉える思想・哲学的洞察を示唆するのが、このアリストテレスの考察である。

他方、2007年、文部科学省は『食に関する指導の手引』（全199頁）を刊行した。その中で、「食に関する指導の目標」を6つ掲げた。①食事の重要性、喜び、楽しさを理解する、②心身の成長や健康の保持増進と望ましい栄養や食事のとりかたを理解し自己管理能力を身につける、③食物の品質・安全性等について自ら判断できる能力を身につける、④食物の生産等に関わる人々へ感謝する心をもつ、⑤食事マナーや食事を通じた人間関係形成能力を身につける、⑥地域の産物、食文化や食に関する歴史等を理解し尊重する心をもつ。

ここには、上からの常套的な指導目標が掲げられているだけで、原理・原則がない。例えば、(1)子ども（人間）が、いかに本性的、主体的にそうした能力を自ら我が物にしていくかという人間発達の視点や、そのため指導原理や方法については言及されていない。(2)また、「知育・徳育・体育」の土台としての「食育」の意味や原理とは何かが鮮明ではない。(3)さらに、食と人間形成（人間発達）に関する原理的考察は全く示されていない（ようやくそうした研究・検討を行うという政府動向もあるが）。これらが欠如したままでは、食育・食教育は、ともすれば知識主義や管理主義・「道徳主義教育」（「しつけ」、「残さずに食べよ」というだけの命令・服従の強制）に陥る虞が大である。アリストテレスの指摘のように、子ども自らが発達する能力を、人間の本性（Human Nature, Humanity）において秘めているということを踏まえて、その指導原理を検討していくことは、今後につづく私たちの課題であろう。

2、アリストテレスを研究することの意味・意義について

アリストテレス（前384 - 前322、享年62歳）は、「万学の祖」といわれる。その哲学の視野は、存在論・形而上学、論理学から始まって、自然学・動物学・植物学や弁論・詩学、そして『デ・アニマ』や倫理学に及んでいる。『デ・アニマ』は晩年の作品であると

いわれるが、そこにはそれ以外の哲学研究が凝縮されている。その端緒は、プラトンの開いたアカデメイア（大学）で学び研究した初期の時代の作品とされる『形而上学』（第一哲学）の中にも垣間見ることができる⁽⁶⁾。そのような該博な哲学的知見を背景にしつつ、究極的には生命としてもっとも発達した人類・人間の生命の可能態から完成態への生成発展、人間の本性の発達過程や構造について探求された。それが、『デ・アニマ』である。今日の学問世界においては、「人間学」「哲学的人間学」とよばれる学問研究や「ライフサイエンス」が対象とする分野と重なる。

本稿では、第一に、『デ・アニマ』を主たる対象として、アリストテレスが探求した生命の全体像について概観する。第二に、栄養・味覚を中心において『デ・アニマ』を読解・考察し、人間における味覚の本質やその能力（ファンタシアやヌースの機能など）について検討する。第三に、食育・食教育の指導において『デ・アニマ』から筆者が示唆された事柄についてまとめていくこととする。

I、靈魂（魂）に関する研究の意味（第一巻の概略）

同著第一巻の冒頭において、魂を研究することの意味が述べられる。すなわち、「魂に関する研究を第一位の学問のうちに数え入れることは、当然である。魂についての知識は、真理の知識全般に大きく寄与するものと思われる」（402 a）⁽⁷⁾とした。ここにおいて、人間研究が哲学の第一級の研究対象であり、人間に関する学問研究こそが第一級の課題であると断言している。また、研究方法についても、プラトンの「イデア論」とは大きく異なっており、同著は魂・理性の能力に対して自然学等をベースに実証的・経験科学的に探求するものであると表明している。例えば、同著は次のように言う。「魂の研究は、自然学者の仕事なのである」（403 a 20、強調点は新村。以下同じ）。「思惟すること（ノエイン）は、魂（生命）に独自のものであるように思われる」が、「思惟は一種の表象（ファンタシア）であるか、あるいは表象なしにはありえないものとすれば、魂もまた肉体なしにはありえないであろう」（403 a）と探求の方法原理を述べている。

「表象」とは、外界の対象物や現象に対する直接的な感覚や知覚に対して人間が心の内面において抱く印象・イメージなどのことである。表象が生まれるためには、まずは眼前にある個々の具体的事物や現象に対する五感（五官）による感覚が先行し前提されなくてはならない。視覚などによるその感覚機能や感覚能力（感能）がなくては、「表象（ファンタシア）も思惟も生まれない」（403 a）。従って、「表象」や「思惟」は人間の肉体と切り離すことはできないということである。この件を同書は次のようにいう。

「魂の様態（パトス）もまた、すべて肉体とともにあるように思われる。怒りや穏やかさや恐れや憐れみや勇気や、さらに喜びや愛することと憎むこともそうであるようにみえる。なぜなら、これらの感情と同時に、肉体は何かを受けるからである」（403 a 20）。「魂の様態は生物の本性的な質料から切り離されたものではなく、怒りや恐れのようなも

のは少なくとも質料に属している」(403 b, 20)として、生物の肉体という質料(素材、器官)をはなれて思惟はないとしている。

同著はこのように魂の特徴について述べ、先人の見解を吟味していく。先人とは、アナクサゴラス、デモクリトス、ターレス、ヘラクレイトス、クリティアスなどである。先人たちが行った論議の主題は、「魂に本性上備わっているものは何か」、「魂における運動と感覚はどのようにおこるか」(411 b, 30)などである。先人の見解を批判しつつ同著の見解の一端を記せば、それは次のようである。

魂の本質とは、自らを動かす(活動、行動、変化発展、転化)ことである。あるいはまた、魂は感覚的な事物(対象)によって動かされること、魂自身が動かされるともいえるし、また、自らを動かすものである。しかしこの後者こそが魂の本質であり、肉体を離れて思惟することができる(思惟対象を思惟する)。魂の「運動」(活動)とは、①「移動」すること、②「質的变化」をすること、③「減少」(衰退)し、④「増大」(生成・成長)することをさしている。魂は、この運動の過程において本性(人間の本性の実現に向かって)を生成発展させ、また、衰退・消滅させるものであるとする(411 b, 30)。

以上のように、魂とは肉体そのものではない。魂は肉体を統一させるものであり、その意味で魂なくば肉体は崩壊する。植物の中の原理(=「栄養的能力」)もまた、魂の一種であるとする。栄養能力は魂そのものを維持発展させるところの原初的かつ不可欠で普遍的な魂の能力(生命力)であると意味づけられる。こうして「魂と肉体の部分とを対応(統合)させる能力とは何か、それを探求すべきである」(411 b, 30)と同著の課題を提示して、第2巻目以降、これを展開する。

II、魂の概念・定義、及び栄養・感覚能力についての展開(第二巻の概略)

第二巻は、全12章からなる。魂の本質について全面的な考察が展開される。これらを一言でまとめてしまうと同著がいう概念・定義・論理が混乱するので、各章ごとに要点をまとめていくことにする。

魂の本質規定について(第1章)

魂(生命)とは、自分で自分を養い増大し減少することをいう。「魂は自分みずからの内に運動と静止の端緒(アルケー；原理)をもつ」特定の自然物体(生物)の本質であり、本質規定である。これを「完成態としての自然物体(生物)」(412 a, 10)という。

ここで言われていることは、第一に、「有機的」であるようなもの、すなわち、そのような「器官」をもつものが魂である、とする。「有機的」とは、自ら生命・生活機能を備えたもの、すなわち、生活力を秘めた生物(「自然物体」)の働きをいう。第二に、その「器官」そのものは質料(素材)であるが、それが秘めている機能・能力は、「可能的に生命をもつ自然的物体(生物)の(最初の)完成態である」ということである。その例示として同著は、「眼の魂」(形相)と「眼球」(質料)そのものとの対比させて説明する。す

なわち、「眼球」そのものは「視ること（視るため）の質料（素材）」であり、視覚の可能態にある。これに対して実際に物を「視ること」ができるということ（視覚能力が働いている状態）は「眼の魂」であり、「眼の本質規定としての実体（完成態）」(412 b, 20) であるとする。

植物の魂、動物の魂とかかわって（第 2 章）

植物の魂は、「栄養的能力」に限られている。「感覚能力」もなく、したがって「思惟能力」もない。他方、動物であることは、まず感覚（能力）によって初めて可能である。その魂が感覚（能力）をもつなら、「表象力と欲求・欲望をもつ」ことになる。「魂とは、それによって我々が生き（栄養）、感覚し、思考するところの当のものである」(414 a, 10)。従って、それらの魂は「形相」（エイドス；魂の働き・能力そのもの、それ自体として存立し作用するもの、本質・目的）である。その意味で、魂は、ある一つの「完成態」であり、その能力をもつものの本質概念（ロゴス）」(414 a, 20) である。

魂の諸能力について（第 3 章）

以上のように、魂には様々なものがある。①栄養的なもの、②感覚的なもの（五感、快感と苦痛など）、③欲求的なもの（欲望、気概・意欲、意志）、④場所的に運動できるもの、⑤思考的なものなどである。動物はみな栄養の感覚（栄養的能力）をもっている。多くの動物が有する「触覚」は「栄養の感覚」だからである。味は触覚されるものの一つである。飢えと渇きは欲求である。渇きは湿ったものと冷たいものへの欲求である。飢えは乾いたものと熱いものへの欲求である。味はこうしたものに一種の「うまさ（おいしさ）」をつけるものである。（栄養の能力と味覚とは一体のものであるとしている。）

動物のうち「触覚」をもつものには「欲求」も備わる。あるいは「表象力（ファンタジア）」もあるかもしれない。また、動物には「場所的運動」のできる器官も備わっている。他のものには、「思考能力と理性」も備わっている (414 b, 10)。

このように動物には様々な能力が備わっているが、次のことは確かである。すなわち、「栄養的能力なしには感覚的能力はありえない。さらに触覚的能力なしには他のもろもろの感覚は一つも備わらない」(415 a)。同著は、「触覚能力＝味覚能力」であり、それをもって栄養的能力が発揮されることで、生命の維持存続や諸他の感覚（視覚など五感）の調和がはかれるとし、視覚・聴覚など諸感覚の可能的・現実的な魂（機能）は、「栄養的能力」→「触覚＝味覚能力」を土台とし、その上において機能するという。次章（第四章）において、この点がさらに展開される。

栄養的能力と魂の生成発展（第 4 章）

詳細は後述するので（IVにおいて）、ここでは主要な論述のみを記す。

この第 4 章全体のテーマは、魂の三つの主要な能力（栄養・感覚・思惟）のうち、栄養が焦点である。「栄養摂取と成長とは、魂の最初にして最も共通的な能力であって、これによってすべてのものに生きることが備わる。栄養の仕事は、栄養物を摂取し成長をもた

らすことである」(415 b, 20)。「その結果、自分と同じような他のもの(子ども・子孫)をつくること(中略)、それによって、魂は永遠で神的なものに与ることになるのである」。従って、「栄養的能力と成長(的)能力とは、魂の同じ能力である」(415 b, 20)という。ここでは、宇宙における有機的存在を存在たらしめる魂の原点(始原・原理;アルケー)として「栄養(的能力)」を広く(宇宙的に)、また深く(生理学的に)位置づけていることが、同著の特徴であると観ずる。

感覚についての原理的考察と総論の展開(第5章～第12章)

第5章では、感覚することの原理(その可能態から現実態への「質的变化」)が考察される。第6章では「共通感覚」に言及され、第7章から第11章は視覚(光と色)、聴覚(音と聴覚)、嗅覚、味覚などに触れている。第12章(最終章)は、まとめである。

感覚の原理について

感覚とは、(A)「動かされること」と(B)「何かを受け取る」というに2側面をもつ。前者(A)から後者(B)への転化は、感覚における一種の「質的变化」(416 b, 20)を意味すると同著はいう。(A)は「他のもの(外部にある対象)なしには感覚は生じないことを意味し、(B)は「魂において感覚していることを感覚する」という事態をさす。これを言い換えると、(A)は「可能態にあるものとしての感覚」であり、(B)は「現実態においてある感覚」(417 a, 10)である。対象物によって人間の感覚が「作用を受け、動かされる」という事実と、人間自らが対象物を意識的に言わば凝視して確認するように「現実には魂自身が(意識的に)感覚能力を働かせること」(417 a, 20)とを同著は区別する。自分が感覚していることを感覚する(自覚する)ことで、感覚は可能的な状態から「現実態としての感覚」へと「質的転化」を遂げる、という論理である。

この感覚能力には後述するように、「表象」や「思惟に近いもの」が内在している。研究者はこの「質的变化」した感覚を「内部知覚」⁽⁸⁾とよぶ。また、感覚が何を受け取ったかは、知識や思惟(認識)能力がなくては、例えば「あれはこれだ(あれはシオカラ・トンボだ!)」(新村)と知覚することは不可能である。それゆえに、現実態として働いている感覚は、表象・思惟と何らかの繋がりなしには成立しないであろうことは確かである(417 a, 20)。

同著はこのことにかかわって、大変面白く重要なことを指摘している。

すなわち、感覚の質的变化を知識や思惟の問題・場合と相関させて説明を試みている。知識・知的能力(思惟能力)にも、三つの質的变化がある。それは、①「素質(ヒュレー)としての知的能力を備えている」段階、②「自ら欲すれば、外部からの妨げが無い限り観る能力(知識)を働かせることができる」段階、③「すでに観て(知っており)、知識を働かせて、(魂;思惟能力の)完成態に在る(者の)」(417 a, 20 - 30)段階である。

上記三つの段階のうち、③こそが「本当に知っている」というものであり、魂・思惟の「完成態」とすると同著はいう(417 a, 20 - 30)。これは現代の人間にも理解可能な論

理(ロゴス)である。同著はさらに、これについて付言する。

①と②との段階にある者たちは、「可能態において知る者たち」であり、「現実態において知る者となる人」である。「その①の人は、学習によって質的に変化させられるのであって、多くの場合は、その反対(無知)の状態から転化するものである」。「その②の人は、算術とか文法とかの知識はもっているが、それを働かせていないことから、働かせることに転ずる人であり、①の人とは別の仕方(活動)が必要である」(417 a, 20 - 30)。

このように述べたあとで最後に同著は、きわめて意味深長なことを言い添えている。次のようにである。

「そこで思惟するものや思慮するものを可能態にあるものから完成態へと導くことは『教授』という名称ではなく、他の名称で呼ばれることが正当である」(417 b, 20)と。同著は、思惟する能力(知的能力)が「質的転化」を遂げるには、(A) 欠如の状態(無知)における転化、および、(B) (知的能力の)状態と(人間の)本性(ピュシス)における転化とがあるが、「教授」することは必ずしもこの知的能力の「質的転化」に繋がらない場合があることを危惧して、上記のような提言をしているのである。

その理由に当たると思われる言明が同著にある(417 b)。すなわち、次のようにである。

「教授」されることも学ぶ者にとっては「作用を受ける」ということであるが、それは一義的ではないからである。例えば、(1) ある場合は、知の完成態にあるもの(教師)によって、「(学ぶ者・生徒の中に)或るものが消滅させられる場合がある」からである。また、(2) 他の場合は、完成態(教師)によって可能態にあるもの(生徒)が完成態になる場合、単に「同類のものが維持される」だけということもあるし、「別種の質的変化」を遂げるということもあるからであるという(417 b, 20)。(これは、アリストテレスの哲学研究がプラトンと同方向を目指しつつも、イデア論を批判したようにプラトン哲学とは同質にはならず、それを超える哲学を創造するというアリストテレス自身の生涯に亘る労苦と想いの奔出なのであろうか。)⁽⁹⁾

これもまた、「善き生・生き方」を模索し、「観照的思惟」の自由を最高の価値とした人間・アリストテレスの靈魂論から発するものであろう。知識の詰め込みや教え込みでは、魂は総体として自己を自己として確立しえないことを強調するものであると思う。

感覚における可能態から現実態への質的変化の場合も、上述した思惟の場合と同じであり、また同じ問題を胚胎していると同著はいう。

共通感覚について

第6章は、「共通感覚」について述べている。感覚には三通りのものがある。第一は、「事体的に、直接に感覚されること、個々の感覚に特有なもの(白い花をみて白いと感覚する)である。第二は、付帯的な感覚である。「白いものがディアレスの息子だ」という視覚の感覚である。第三は、すべての感覚に共通なものとしての共通感覚である。これが感覚するものは「運動、静止、数、形、大きさ」などである。「大きさ」を例にあげれば、

それは触覚によっても視覚によっても感覚される。この共通感覚によって自己の周囲に対するリアリティが構成され、また、表象（想像力；ファンタシア）や構想力など、思惟的なものや知的能力（思慮する力）へと転化する働きを魂は獲得することになる。

触覚・味覚と思慮する力の相関について

すぐ上で述べた点は、第9章のテーマとなっている。

同著はいう。「他の感覚においては、人間は多くの動物たちに取り残されているが、触覚・味覚にかけては他の動物たちよりも格段に厳密に区別できる。それゆえに人間は動物のうちでも最も思慮あるものである」（421 a, 20）。このような基準をもとに、さらに次のようにさえいう。「このことは（人間における触覚＝味覚の繊細さと思慮の性質との相関）、人間の種族間にも影響を与える。けだし、肉の硬い人たちは思考能力の点で素質が悪いが、肉の柔らかい人たちは素質が善いのである」（421 a, 20）と。

そうであるかどうかはともかく、ここで重要な点は「栄養—感覚—思惟・思慮」は、それぞれがバラバラに機能するのではなく何がしかの連関をもっており、その機制が全体としての魂（有機的生命）を形づくっているということを確認することである。「栄養・味覚」の能力は感覚・思惟に作用するし、「感覚」も「思惟・思慮」の能力も他の魂に作用して、全体としての魂の質的転化（生成・発展）に寄与するということである。

原初的な感覚と形相としての感覚

第12章（最終章）は、総括としては不十分で未完成であるように思われる。原初的な（基礎的で不可欠な）感覚器官は、「感覚を質料を含まない感覚的な形相を受け入れるものである」（424 a, 20）。それは「蠟と刻印」とは一体で封蠟と感知し、印が金でできているか銅でできているかという、その質料（素材）はともあれ、刻印を刻印として受け入れるとする。

同著が言わんとすることは、「感覚はそのように形相（ロゴス）の点で作用を受けるもの」であるから、知識や思慮の働きをもって真理・真実の形相を身につける学びが不可欠であるということを含意している。これを味覚に当てはめて考えれば、味覚は「栄養物」を舌という媒体をもって味わい吟味する能力であるから、献立名・料理名という形相を鵜呑みにすることでは、完成態としての「味覚」（能力）を獲得したということにはならない。形相とともに質料もまた感覚できる味覚能力を育むことができなければ、人間という魂の原因・目的を全うすることにはなり得ないであろう。

Ⅲ、共通感覚、表象、理性（思惟・認識）について（第三巻の概略）

第三巻は、全13章からなる。その主題は、上記標題の通りであるが、上述してきた感覚をはじめ、欲求、欲望、意志などについての検討を含んでいる。人間の魂の最もすぐれた能力である理性を中心主題にすえて、人間の意欲、行動力、主体性、創造性などの本質を考察するものである。以下に、その概観を記す。

再び、共通感覚について (第 1～2 章)

共通感覚は、対象 (の大きさ・形・動きなど) を全体的に把握し、「感覚していることを感覚し」(現代においては「内部知覚」という)、またその感覚そのものから距離をおきつつ、そこから飛翔して表象 (想像、構想) し、さらに自立的に思考する能力へと発展していく出発点をなす能力である。このように思惟力の基底をなすところの共通感覚から論を出発させるのである。共通感覚は例えば、「白いもの」と「甘いもの」とは別であると判別すること、自分が今「色を見ているということを感じている」と意識できること、「砂糖の白さを見て、その甘さ」を感じるという感覚 (連想する) などをさす。以上のように、共通感覚は「知識獲得への第一歩」をなすものである。

表象能力 (ファンタシア) について (第 3 章)

表象 (あるいは想像) の能力は、特殊な個物に対する「感覚」とも論理的に思惟する「思考 (理性)」とも異なる。しかし、感覚なしには表象は生じない。また、表象なくしては「意見をもつ (ドクサ)」「思惟する」ことも起こりえない。しかし、表象は「意見」そのものではない。表象の様態 (パトス) とは、「我々が欲するとき我々の自由になる記憶の整理箱の中にもものを入れ、そしてその像 (イメージ) を創る人たちのように、目の前に何かを創り出すことができる」(427 b) ものである。

そのイメージは、「比喩を使って何かであると言ったり、何事であるかを想念したりする作用」である。従って、表象は真実から離れて虚偽となることもある。「動物にも表象能力は備わっているが、多くの動物は表象によってすぐさま行動する。何故なら、野獣は理性をもたないからである。人間の場合においても、感情、病氣、睡眠の如何で理性が被^{おお}われてしまうということが起きる」(429 a)。

認識能力・理性の本質について (第 4 章～第 8 章)

魂には思惟部分 (能力) がある。それは、感覚能力が感覚対象に対するのと同じように、理性も思惟する対象をもつ。その場合、混沌とした対象ではなく混じりけのないものを対象とすることができなければ、その対象を思惟し「支配する」(把握する) ことはできない。また、「理性は可能的なものであるという本性以外の本性は何ももっていない」(429 a, 20)。すなわち、「魂がそれによって思考し判断するところの理性とは、思惟する以前においては現実的に存在するどんなものでもない」からである。さらに、「理性そのものも、思惟される対象と同様に、思惟されるものである」(430 a)。

さて、その理性にも性質の異なる二つのものがある。

(A) 一つは、大工が確立された技術をもって家を建てるというような「質料的な理性」(研究者は「受動理性」⁽¹⁰⁾ という) や、既に誰もが使うことができる知識のようなものである。

(B) もう一つは、「すべてのものを新たに創り出すというような理性 (「能動理性」⁽¹¹⁾) である」(430 a, 10)。これは、「質料的な理性」を超えて、さらにその本質、

真理・真実を見極めようとする理性である。確立された理性の働きを受けること（享受する）よりも、新たに理性の力を発揮すること（能動理性を働かせること）、「能作的原理」の方が、つねにいつそう「尊い」とされている（430 a, 20）と、同著はいう。

そのような能動理性・能作的原理とは、「可能態」における色（存在するが見えない色）に「光」をあてて「現実態」における色（見える色）にする、その「光」のようなものである。この永遠に自ら輝く「光」のような力こそが、「理性の本質」である。そして、「この理性のみが不死であり永遠である」（430 a, 20）。何故なら、「この理性は不受動的（能動的）であるが、受動的な理性（大工の使う確立された技術のようなもの）は可滅的であるから、我々は何も記憶していない」となるからである。すなわち、「この理性（能動理性）なしには、我々は何もものも思惟しない」のである。このように根源的に「真偽を問い、個々のものを統合する力」（430 b）が理性である。

欲求と理性について

第9章では、運動や生成発展（「成長力」）をもたらす能力としての「欲求」と「理性」との関係を問う。結論は「欲求は成長力の究極の主人公ではない」とする。何故なら、「克己心（実践的理性）のあるものたちは、欲求し欲望すれども、それらに従うのではなく理性に従うからである。」理性（「実践的理性」）をもって、感覚や表象（欲求）を統御するのである。欲求は、「表象であり一種の思惟作用であるから成長力である」と思われるが、しかし、多くの人間や動物は「知識に背いて、諸々の表象（欲求）に従う。動物には思惟・推理力はないが、表象力はあるからである」（433 a, 10）。こうして真の「運動（行動）と成長力」は、表象が生み出す「欲求的部分や気概的部分」ではなく、理性（ロゴス）の力による。「理性は将来のこのために、抵抗や自制することを命ずるが、他方、欲求・欲望は差し迫っていることの為に従うことを命ずる。というのは、差し迫った快いものは、将来のことを見ないから絶対的に快く、また絶対的に善く見える」からである（433 b）。

以上のことから、次のことが言える。理性を生むものは表象を土台とするが、その表象にも動物のもつ「感覚的表象」と、人間に備わる「熟慮的表象」とがある。後者は、理性に繋がる「ドクサ」（憶見・憶断）の能力を含む。それは「意見」をもつこと（判断すること）や「信念」を抱くことに繋がる。それらに「説得力」をもたせるのは「言葉」であり（426 b）、その有無が行動の抑制的か無抑制的かを左右する。つまり、「本性上つねに、上位の欲求がより支配的であり下位の欲求を動かす」（434 a, 10）からである。

自然・環境・周囲との接触が魂を生成発展させる

最終章（第13章）は、理性をつくる基である感覚が天体や宇宙を含めた自然や環境と人間との「接触」（触覚を軸にした）にあることを強調する。それがこの宇宙において生存する魂（生命）のメカニズムであるとしている。それを抜きにしては生物・生命の本質

は究明できないとする (435 a)。

その「接触」とは、(A) 環境と生命、(B) 生命同士、(C) 生命内の感覚や諸能力相互という三つの側面にわたるものと理解できる。それらの接触によって形成される能力の最高形態が人間とその理性的能力ということになる。『デ・アニマ』は、このように人間存在の本質と核心とを解明したものである。

IV、栄養と味覚について示唆されるもの

魂の形相 (完成態) としての栄養活動 (能力)

動物一般もまた栄養活動や栄養への感覚、そしてこれに対する欲求 (食欲など) をもつ。それによって自己の生命を維持発展させ子孫を残すのであるから、魂 (生命) の活動において不可欠なものである (414 b, 10 - 415 a, 20)。人間においては、味覚など感覚の発達や食と健康の知識 (思惟) をもって行動することが「魂の形相」(現実態・完成態、本質規定) の一つである (414 a, 30)。このような魂の原因でもあり目的でもあるような栄養能力とそれを促進 (成長) させる味覚 (栄養活動の起動因) の発達において、何を備えるべきかが思惟の課題であるとする。特に、以下にみるように、食材への感覚、食材そのものの生産、身体感覚や味覚などと知識 (認識) とが融合・統合されることが最も重要であると同著はいう。この点が同著から示唆される最も重要な点である。

アリストテレスは別の著作で「放埒な食への魂、好き嫌いは、動物に最も共通な感覚である。それは最も獣的なことである」⁽¹²⁾ と明言し、人間の魂の特質を強調する。

栄養活動 (能力) の発達に不可欠な三要素

同著は、栄養活動について三つの要素を挙げる。すなわち、①「養われるもの」(食材・食物など)、②「養われるところのもの」(身体・感覚・精神)、③「養うもの」(「原始の精神」「栄養の働きをする原初的 (不可欠で基本的) な魂」、食欲) の三つである (416 b, 20)。

同著は前述したように、人間 (魂) の質的变化をうまなような「教授をすること」に注意を喚起していたが、教育それ自体を否定したわけではない。「教えること」とはそのような「教授」(知識の注入) をすることと同義ではないから、上記の三つの事柄について「教えること」「学ぶこと」は人間の魂にとって不可欠である。

同著も次のように述べる。すなわち、「完成態にあるもの、つまり教え得るもの (教師) から学び知識を受けとること、すなわち可能態 (子どもの魂) にあるものから現実態 (成人の魂) へ導くこともまた、作用を受け取るというべきである。その発達への促進作用の中には、無知からの転化 (成長・発達) とともに、生活実態と人間的本性 (ピュシス) における成長・発達とが含まれる」(417 b, 20) とする。

ここには、(A)「栄養機能・味覚の感能や知識」の成長と、(B)「食 (栄養・味覚) を通して」の人間の人間としての魂の形成、すなわち人格発達の課題が示唆されている。

栄養能力・味覚能力の発達と「味覚の本質」について

感覚能力の状態、その生成発展を思惟（認識）の発達とのアナロジーで先にみた。感覚にも思惟同様の発達の姿があるとするのが同著の考えである。

思惟の発達とは、

①第一に、素質（ヒュレー）として知的能力をもっている状態（段階）である。これは、可能態にある知性である。

②第二は、自分が欲すれば知ること・観ることができるという状態（段階）である。

③第三は、観照的能力をもって認識するなど常に知識を働かせて魂を生きている状態である。この最後の段階が現実態・完成態にある思惟能力である。

これと対応させて栄養・味覚能力を考えれば、つぎのようになる。

①感覚（味覚）の「機能・素質」（舌をもっている）を備えている。

②「自ら欲すれば」、感覚を働かせ、味わおうとすることができる。

③「常に感覚・表象や知識（思惟）を働かせて」食事（食材・献立・料理）を味わうことができる、というように考えることができる。食育・食教育の目標や課題もこのような視野をもつことができる。すなわち、①から②への発達、②から③への発達をどのように実現できるかということである。

このような味覚を発達させるという食育の課題について、同著から強く印象付けられることは、次の点である。

第一に、「感覚すること（味覚の発達）は、自分の力だけではできない。何故なら、感覚されるものがあらかじめそこに存在しなければならない。感覚されるものは個々のものであり、外的なものであるという理由による」（417 a）。その上で、食材や献立・料理は優れたものでなければならないことを意味する。また、「それは遠くにあってはならず近くになくなくてはならない」。つまり、地産地消の生活環境が重要であるということでもあろう。

第二に重要な視点は、もともとその本質において「感覚能力は現実態においてあるのではなく可能態にあるのであって、現実態にあるものによって作用を受け動き感知する」（417 a）のである。もっと端的に言えば、聴く気（現実態）がなければ聞けども聞こえず、見つめる気がなければ見れども見えずということであり、従って、味わおうという意志・意欲なしには感覚器官の能力（感能）も發揮・発達することはないということである。このような意志があつてこそ、「感覚対象（食物）が自己にとって現実のもの（意識的な対象として現実化する）となり、それによって感覚器官（舌・口腔）の能力もまた現実化する（その働き・味覚を深く豊にする）。これらは事柄としては同時に起こり、同一一体のものであると同著はいう（416 b, 20 - 417 a）。

第三に、味覚は他の感覚と相俟って、表象を創り出す。食材や献立・調理法に観られる食文化の知識もまた、その味覚や表象に作用する。味覚とは栄養機能・感覚機能・思惟機能の融合した総体的な魂（生命）によって生成発展するものであると総合的な視野をもつ

て考えられるべきものであるということである。以上の点に、人間の味覚の本質があると考えたい。

このような栄養・味覚能力の発達、日々の子ども(人間)の生活のなかでどのように生ずるであろうか。同著はこの点についても重要なヒントを与えているように思う。このような点こそが、アリストテレスから示唆される味覚の本質である。次の点もまた、味覚の本質をなす事柄である。

表象の能力と食への主体的・共同的な能力の発達

既に触れたように、魂は外的な対象物や環境に対して「内部知覚」を働かせることができ、そこから生まれる「表象能力」によって、自分にとって重要と思われる様々な事柄についてその人に固有の印象(意欲的になれる食へのイメージなど)をもち、判断・識別し、想念(想い)をもち、そこから欲求・意欲、さらには、自分の望みを叶えようとする構想力(家族のための献立を考え、自分で調理してみたいなど)を育むことにも至る。

それは個人個人において千差万別で多様であろう。食体験や経験の豊かさ、孤食とは反対に家族団楽しての食卓の情景、食べ物に関するさまざまな記憶や思い出、親や学校における給食や栄養教職員・教師のお話(教育、知識)、またさまざまな情報、野菜作りの体験や生産者の苦労話などなど、このような生活体験・経験が、子ども(人間)一人ひとりの魂の中に食に関かわる豊かな表象を生み出すであろう。

V、結び一食を通して魂(人間力)の豊かな発展を

食育・食教育の政策や学校での活動は、その先端にあつて実践と研究を進めている場合でも、ともすると体験活動をただ漠然とどこまでも広げたり、がむしゃらに知識の詰め込みに傾斜したりする傾向にある。

アリストテレスの「デ・アニマ; 霊魂について」から学ぶべき点は、①栄養能力(食と身体の状態を自分の心身の感覚をとおしてわかること)、②感覚能力(味覚能力)を豊にすること(その際に、子どもの内面に生まれるファンタシア(表象・内部知覚・構想力など)を大事にすること、そのことが五感の豊かな発達に繋がる)、③その子どもの表象能力(思惟能力に繋がるもの)を大事にして、理性的能力(知識・認識・価値観など)を子ども自らが形成・獲得できるような「食の指導」の視野・構図が必要である。そのようにして、①、②、③が一体的な構造をなすものとして食に関する能力形成を展望できたらよいと思う。

子どもは、すばらしい給食であつたら(あつても)、皆一様に「おいしい!」という。そのような常套的な言葉で終わらせるのではなく、その「おいしい」という感覚・味覚を、生活体験などあらゆることを視野に入れて、もっと別の「言葉」で表現させようという取り組みが、フランスで展開されている(2004年、フランス国家栄養教育法)。このような言語化の活動が味覚の発達を誘導する方法と考えられている。「おいしい食事(給食)な

くして味覚や魂の能力は育たない」というのは、当然にその前提にある。

その栄養教育活動は、感覚能力と思惟能力との中間にあるといわれる「表象」（印象・イメージ・想念・願望・欲求・構想力）を言葉で表し、それらの「想い」を子どもが自分自身においても対象化し吟味するということである。この眼には見えない内面の「想い」をクラス中で交流することができたら、食に関する捉え方は飛躍的に豊かになり、それをもとに思惟の能力・知的探求の能力をもまた発達させ高めることができるものであろう。ここが実践的に検証されたならば、アリストテレスの生命論（靈魂論）は、さらに深められるであろうと思われる。

注

- 1、西欧や米国の学校給食制度や健康教育・家庭科教育などの発展史については、次の文献に詳しい。
M.E.Bulkley, *The Feeding of School Children*, 1914, University of London. Louise Stevens Bryant, *School Feeding*, 1913, University of Pennsylvania. 福祉としての学校給食の意味については、城丸章夫著『体育と人格形成』1980年、青木書店、小川利夫・高橋正教著『教育福祉論』などを参照。
- 2、古代ギリシア圏における「共同食事」については、新村洋史「古代ギリシアにおける『共同食事』の意義に関する考察—共食文化・教養形成の起源を探る—」『名古屋芸術大学研究紀要第35巻』を参照いただきたい。
- 3、注1に同じ。
- 4、「健兵健民」とは強い兵隊（壮丁）をつくり、強い銃後の民をつくるという日本の15年戦争時代における軍事国家の政策である。その「文部省令」は当時の文部大臣・鳩山一郎によって策定された。神谷昭典著『日本近代医学の相克—総力戦体制下の医学と医療』1992年、医療図書出版社を参照のこと。厚生省設置の目的もまた同じであった。小島しのぶ著『学校給食変遷史』1993年、大学教育出版。
- 5、今道友信著『アリストテレス』2004年、講談社学術文庫、山本光雄『アリストテレス—自然学・政治学』1992年、岩波新書、コルネリア・J・ド・フォーゲル著、藤沢令夫他訳『ギリシャ哲学と宗教』1969年、筑摩書房、『世界の大思想4・アリストテレス』1972年、河出書房新社、所収「解説」（出 隆）、ツエラー著・大谷長訳『ギリシャ哲学史綱要』1975年、未来社、山川偉也著『古代ギリシアの思想』1993年、講談社学術文庫、出 隆著『ギリシアの哲学と政治』1969年、岩波書店、『三木清全集第九巻』1967年、岩波書店、中畑正志訳『アリストテレス・魂について』2001年、京都大学学術出版会、『アリストテレス全集7巻』2014年、岩波書店などを参照。
- 6、『形而上学』の特に第11巻、第12巻は、感覚や思惟に関する記述が多くある。第11巻には、人間の健康時と健康でないときの感覚の大きな違いについて論じている。自然学は「観照的（理論的）な学的認識」であり、実践的な学的認識や制作的な学的認識とはことなること、存在するものを存在するものとして認識するものが自然学であると述べる（1063 b, 1964 a - 10）。第12巻には、魂の始原（原理）、すなわち宇宙そのものに天空と自然の全体は依存している。この始原は或る生を生きるものであり、純粋な快であるから、覚醒、知覚、思惟することは最も快であり、希望や記憶はそれらのものゆえに快であると、思惟すること=知性をもっとも重要だと述べる（1072 b, 10 - 20）。知性の現実活動は生そのものである（1072 b, 30）。すなわち、最善を生きることに魂の本質があるとすると（1072 b, 30）、など、『形而上学』において、自然学や靈魂論が位置づけられている。『世界の名著8』「田中美知太郎・責任編集、アリストテレス」1979年、中央公論社版の『形而上学』を参照した。

- 7、以下、カッコ内に『デ・アニマ』の原典の頁・行番号を記すことにする。
- 8、山内得立著『ギリシアの哲学Ⅳ・アリストテレスの哲学（上）巻』1967年、改訂初版、弘文堂新社、348頁。藤井義夫著『アリストテレス研究—存在と認識の諸問題—』1969年第4刷、岩波書店、454頁。
- 9、山本光雄著、同前書など参照。
- 10、注8・前掲書を参照。
- 11、注8に同じ。
- 12、アリストテレス『ニコマコス倫理学』（上）、高田三郎訳、1971年、岩波文庫、第3巻 10.1118 a, 30 b-4.